

Title	『山谷詩集注』を読むために(3)
Sub Title	A guide for Shangu Shiji Zhu (山谷詩集注, an annotated edition of Shangu's anthology of poems) (3)
Author	村越, 貴代美(Murakoshi, Kiyomi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.50 (2018. ) ,p.81- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20181231-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20181231-0081</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 『山谷詩集注』を読むために (3)

村越 貴代美

『山谷詩集注』二十卷は、宋の黄庭堅撰、任淵注。黄庭堅（1045～1105、字は魯直、号は山谷道人）の詩およそ七百首について、黄庭堅晩年の弟子である任淵（1090？～1164）が注をつけ、繫年したものである。本誌で二回にわたって、その編纂の経過、テキストに関する調査と考察をおこない、黄庭堅の作品の制作年についても任淵以後の研究成果を踏まえて、整理した<sup>1)</sup>。

黄庭堅の詩は「字字有出处（どの言葉にも由来がある）」と称され、任淵の注は黄庭堅の用語の出典を詳細に調べて、高く評価されている。『山谷詩集注』二十卷全体で四百種を超える書物が利用されているという<sup>2)</sup>が、具体的にどの四百種なのか明示されていない。

そこで以前、別稿<sup>3)</sup>で巻一の注に引用されている文献（主に書物）と詩人を調べたところ、巻一だけで文献は百種を超え、詩人は六十名ほどになった。経書のほか、思想書や歴史書、農業など科学書、筆記小説・詩文・百科全書などが利用されている。仏典も多く、詩人では陶淵明・韓愈・杜甫・蘇軾がとくに多い。中には後に失われて伝わらない書物もあり<sup>4)</sup>、資料的価値も高い。

任淵注がどのようにしているか、巻一の「古詩二首上蘇子瞻」其一の冒頭「江梅有佳実、託根桃李場（江梅に佳実有り、根を桃李の場に託す）」二句の注を例にすると、次のようである。

---

1) 『『山谷詩集注』を読むために』、『言語・文化・コミュニケーション』48号、2016年12月、63～89頁。「『山谷詩集注』を読むために (2)」、『言語・文化・コミュニケーション』49号、2017年12月、103～131頁。

2) 莫礪鋒『江西詩派研究』、齊魯書社、1986年、54頁、参照。

3) 「黄庭堅に詩を学ぶ——姜夔」、『風絮』13号、日本詞曲学会、2016年12月、1～27頁。

4) 呉曉蔓「任淵『黄陳詩集注』所引宋人佚書考」、『古籍整理研究學刊』2012年第2期、43～53頁、参照。

文選古詩云、冉冉孤生竹、結根太山阿。此句倣其体。老杜有江梅詩。又有詩云、欲發照江梅。吳淑事類梅賦云、亦果中之嘉實。文選趙景真与嵇茂齊書曰、北土之性、難以託根。場謂場圃。寒山子詩、昨晚何悠悠、場中可憐許。上為桃李逕、下作蘭蓀渚。此句並摘其字。山谷詩律妙一世、用意高遠、未易窺測。然置字下語、皆有所從來。孫莘老云、老杜詩無兩字無來歷。劉夢得論詩亦言、無來歷字、前輩未嘗用。山谷屢拈此語、蓋亦以自表見也。第恨淺聞、未能盡知其源委。姑隨所見、箋於其下、庶幾因指以識月。象外之意、學者當自得之。

『文選』の古詩に「冉冉たる孤生の竹、根を太山の阿くまに結ぶ」とある。この句はその体にならった。老杜に「江梅」詩がある。また詩があり、「発せんと欲して江を照らす梅」という。吳淑の『事類』梅賦に「亦た果中の嘉実なり」とある。『文選』の趙景真「与嵇茂齊書」に「北方は寒冷なので、その土地に蘭や桂などを根づかせるのは難しい」とある。場は農家の畑や庭をいう。寒山子の詩に「昨晚 何ぞ悠悠たる、場中 憐許すべし。上には桃李の徑を為し、下には蘭蓀の渚を作す」とある。この句はその文字を摘録した。山谷の詩律は一世に冠たるもので、意を用いること高遠であり、推察することは難しい。言葉の使い方にはすべて由来がある。孫莘老は「老杜の詩には二字として来歴の無いものはない」といい、劉夢得も「来歴のない字を前輩は使ったことがない」と言った。山谷はしばしばこの言葉を取りあげた。おそらく自認することがあったのだろう。恨むらくは浅学にして、いまだその奥底をすべて知ることが出来ないことである。しばらく管見の及ぶ限りを注記し、月を指し示したい。言外の意は、学ぶ者が自ら得られるであろう。

「倣其体」というのは、句作り全体が前人のどの句を踏まえているか注したものである。「江梅有佳実、託根桃李場」の二句が、『文選』にある古詩の「冉冉孤生竹、結根太山阿」二句に倣っていることをいう。次に「江梅」「佳実」「託根」「桃李場」の典故と用例、説明が並ぶ。続いて、黄庭堅の詩についての任淵の見解が述べられている。とくにここは『山谷詩集注』全二十巻の最初の詩の冒頭部分なので、概説的なことが述べられる。中国の古典の注釈でしばしば見られることだが、凡例に相当するようなことが、こうして注の冒頭に述べられるのである。

ほかに注のタームとして、「用其字」「用其律」「用其意」「用其事」などがあり、また「此借用」もしばしば見られる<sup>5)</sup>。

5) 吳曉蔓・何沢棠『任淵『黄陳詩集注』研究』、北京大学出版社、2018年、14～25頁、参照。

『山谷詩集注』を読むために (3)

任淵の注では、書名や篇名には省略があり、人名は名と字が混在し、通称も使われている。巻数はない。任淵や同じレベルの素養のある人にとっては、これで十分な情報だったのであろう。

『山谷詩集注』は黄庭堅の詩に注したものであるから、任淵の注を参考にしながら黄庭堅の詩を解釈し鑑賞するのが、正統なアプローチである。だが黄庭堅の詩は南宋の時代によく学ばれ、のちに江西詩派あるいは江西宗派と呼ばれる詩風を開いた。江西は黄庭堅の出身地。呂本中が禅の宗派に倣って「江西詩社宗派図」を作り、唐の杜甫を祖とし、黄庭堅・陳師道・陳与義を杜甫の後継者とみて一祖三宗と称し、黄庭堅以下二十五名をまとめて江西詩社と称したのに始まる。南宋初期に盛んに提唱された。

南宋の詞人、姜夔も黄庭堅の詩を学んだ一人である。四十二歳の時に編纂した詩集の自序に、「三薰三沐して、黄太史氏（黄庭堅）を師とし、居ること数年、一語も嚙<sup>つぐ</sup>んで敢えて吐かず」とある。以前の別稿では、姜夔は「具体的にどのように黄庭堅の詩を学んだのか」「任淵が当時どのような文献を利用して注をつけていったのか。どのような文献を黄庭堅が読み、典故として詩を作ったと考えたのか。これをたどっていくと、当時の知識人が共通の教養として読んでいたもの、彼らが共通して備えていた知識が浮かび上がる」のではないかと、というのが調査・考察の動機であり、目的であった。つまり、黄庭堅の詩を解釈し鑑賞するほかに、黄庭堅の詩を学んだ南宋の人たちの学術的背景も、任淵の『山谷詩集注』を通して知ることができるのではないかと。

それを明らかにするための方法として、任淵注の解釈の部分は除き、語句の典故と用例について、表を作成した。便宜的に作品番号（例：0101は巻一第一首）を付し、詩句にも番号を付けた。底本には、劉向榮校点『黄庭堅詩集注』、中華書局、2003年を使用した。省略されている情報を補い、人名は名に統一し、巻数も確認する。たとえば鮑照の詩とあっても、『文選』所収であれば『文選』に拠った可能性が高いので、補う。引用した「古詩二首上蘇子瞻」其一の冒頭「江梅有佳実、託根桃李場」二句の注は、次頁の表のようになる。

こうして任淵の注から、どの語句に注をつけたのか拾っていくと、どのような言葉を詩語として取り上げたのか浮き彫りになることも期待できる。引用した部分でいえば、「江梅」「佳実」「託根」「桃李場」が、黄庭堅が詩に詠い、任淵が注したことで、詩語として定着していった可能性がある。

以前の別稿では、巻一だけで項目（表中の行）は五百を超えた。その後、巻二十まで一通り作業を進めた結果、項目は全部で八千ほどになった。繰り返し引用される書物や詩人

作品番号		句数	語句	書名	巻数	人名	篇名	典故・用例
0101	其一	1・2	江梅有佳実 託根桃李場	文選	卷二九	無名氏	古詩十九首 (其八)	冉冉孤生竹，結根太山阿。
0101	其一	1	江梅			杜甫	江梅	
0101	其一	1	江梅			杜甫	徐九少尹見過	欲發照江梅。
0101	其一	1	佳実	事類賦	卷二六		梅	亦果中之嘉実。
0101	其一	2	託根	文選	卷四三	趙至	与嵇茂齊書	北土之性，難以託根。
0101	其一	2	桃李場			寒山	詩三百三首 (其一三一)	昨晚何悠悠，場中可憐許。 上為桃李逕，下作蘭蓀渚。

をまとめていく過程で、いくつかの点に気がついたので、本稿ではそれを報告したい。

## 一、宋代の書物とその利用

宋代は、印刷術が普及して書物の流通量が増え、個人でも蔵書を構築することが可能になった時代である。ただ、黄庭堅が詩を制作し活動していた北宋と、任淵が『山谷詩集注』を刊行した南宋は、少し分けて考えるべきであろう。

黄庭堅は早くに父親を亡くし、一時は薬屋でもやろうかと考えたこともあったようだが、母方のおじが後ろ盾となって勉学に励み、北宋の治平三年（1066）、二十三歳で進士に及第した。しばらく地方官を歴任し、その間の生活はあまり豊かではなかったらしい。『山谷詩集注』巻二に収められる「寄裴仲謀（裴仲謀に寄す）」詩は元豊八年（1085）一月から五月のころ、黄庭堅四十一歳、監德州德平鎮だった頃の作だが、

我家輦轂下，    私の家は天子のお膝元にあり、  
薪桂炊白玉。    薪も米も、白玉を炊くように高い。

などと愚痴めいたことも言っている。その後、中央に呼ばれて実録編纂の任に当たるなどし、個人でも蔵書は増えただろうが、宮中の書庫をかなり自由に使えたはずである。北宋の宮廷蔵書目録としては『崇文総目』があり、これは勅撰の漢籍目録で、宮廷の蔵書閣である崇文院の書目である。ちなみに、北宋の欧陽脩（1007～1072）は号を六一居士というが、その由来は「書物一万巻、金石遺文一千巻、琴一張、碁一局、酒一壺、そして自身の一翁」である。匹敵するほどの蔵書を、黄庭堅も持ち得たであろうか。

一方、任淵は南宋の紹興十五年（1145）、中年以降に四川の文芸類試で第一となり、紹興十七年ころ、四川制置使王剛中の幕僚となり、その後、四川で双流県令や潼川憲司とな

った。著作は、『山谷詩集注』と合刻した『后山詩注』十二巻のほか、いくつかあったようだが伝わっていない。

任淵は都で宮中の書庫を自由に使える立場にはなかったが、南宋になると商業出版も盛んになり、個人で蔵書を持つことがより容易になった。南宋の私撰書目に、晁公武（1105～1180）の『郡齋讀書志』と陳振孫（1183～1261？）の『直齋書録解題』がある。

晁公武は山東省澶州の出身で、北宋末に金軍から逃れて四川に移住した。紹興十一年（1141）から十七年（1147）まで四川転運使の井度の属僚で、蔵書家として知られる井度が晩年に全蔵書を晁公武に譲った。晁公武は乾道六年（1170）まで四川を中心に地方官を歴任し、所蔵する書物約二万五千巻の提要（解題）を撰述したのが、『郡齋讀書志』である。任淵と、活動の時期も地域も重なる部分がありそうだが、『郡齋讀書志』には『黄魯直豫章集』三十巻『外集』十四巻は著録されているが、『山谷詩集注』は見えない。

陳振孫は任淵や晁公武よりやや遅い時代の人で、浙江省安吉県の人。二十歳を過ぎて官に就き、五十歳ころまで江西・福建・浙江など印刷出版の盛んな地域の地方官を歴任し、嘉熙二年（1238）には中央に推挙されて国子監司業、淳祐九年（1249）には侍郎となった。その間に公私の多くの蔵書を渉猟し、五万余巻の書物を蒐集した。『直齋書録解題』には、任淵の『注黄山谷詩』二十巻、『注后山詩』六巻が、著録されている。また散逸した任淵の『沂庵集』四十巻も著録されている。

任淵が当時利用できた書物の中に、後に散逸したものがある。そうした逸書も、『郡齋讀書志』と『直齋書録解題』を閲すると、どちらか、あるいはどちらにも著録されているものが多く、当時は流通していたことが確認できる。

## 二、曾慥『類説』について

任淵は晁公武や陳振孫と同じ程度に蔵書を構築できた可能性がある。官途につかずパトロンに支援されて生活していた姜夔でさえ、

家無立錫，而一飯未嘗無食客。凶史翰墨之藏，充棟汗牛。

家は立錫の余地もないほど狭かったが、客が来て食事でもてなさないようなことは一食たりともなかった。図書・史籍・書画のコレクションは、汗牛充棟だった。というのである（陳郁『歳一話映』内編巻下）。つまり任淵は、文献を利用する際に、膨大な書物に直接あたった可能性がある。

だが以前別稿で『山谷詩集注』巻一について調べていて気付いたことだが、詩人につい

ては名を記しているケースと字を記しているケースがあり、六朝以前は後者が多い。そしてその詩人（文章家を含む）のほとんどは、『文選』所収の作家たちであった。六朝以前の作品については、個別の作家ではなく、『文選』に収録されている作品について、典故あるいは用例であると注していると考えられる。『文選』では作者の名ではなく字を用いているため、任淵もそのまま字で注をつけたのであろう。

今回、全二十巻を調べてみて、『郡齋読書志』にも『直齋書録解題』にも著録されていない書物で、『文選』の注に引用されているケースがあった。任淵注に「李善注引……」とあれば、それが『文選』注からの孫引きであると分かる。たとえば『山谷詩集注』巻四の「奉答謝公定与栄子邕論狄元規孫少述詩長韻」詩の「世方尊兩耳，未敢築受降」の任淵注に、「李善注引桓子新論曰，世咸尊古卑今，貴所聞，賤所見」とあるが、「桓子新論」は『文選』李善注では「桓譚新論」として引用されている。漢・桓譚撰として『隋書』経籍志には見えるが、後に散逸した。散逸したかどうかの判断は難しい点があるが、京都大学人文科学研究所編『本邦残存典籍による輯佚資料集成』『続本邦残存典籍による輯佚資料集成』（ともに1968年）では、逸書リストとして挙がっている。『郡齋読書志』にも『直齋書録解題』にも著録されていない、すなわち任淵の時代には、すでに散逸していた可能性がある。

任淵が『文選』注からの引用であると明記していなくても、『文選』注の中には見えているが『郡齋読書志』にも『直齋書録解題』にも著録されていない書物に、次のものがある。

『袁子正書』，晋・袁準撰。

『漢書音義』，隋・蕭該撰。

『魏略』，魏・魚豢撰。

『荊州記』，劉宋・盛宏之撰。

『交州記』，晋・劉欣期撰。

『三秦記』，辛某撰。

『三輔旧事』，漢・趙岐等撰。

『三輔決録』，漢・趙岐撰，晋・摯虞注。

『周処風土記』，晋・周処撰。

『述征記』，晋・郭緣生撰。

『春秋感精符』，魏・宋均注。

『春秋考異郵』，魏・宋均注。

『春秋說題辭』，魏・宋均注。

『襄陽記』，晋・習鑿齒撰。

『晋紀』，晋・干宝撰。

『統晋陽秋』，劉宋・檀道鸞撰。

『埤蒼』，魏・張揖編。

『本草經』

これらも、『文選』注からの孫引きである可能性がある。宋代の知識人にとって、『文選』は注も含めて全部暗記して当然の書物だったので、いぶかるには当たらない。

いったい、『文選』のようにすぐれた書物が出ると、それ以前の同傾向の書物が散逸するという事は、ままたある。たとえば任淵は注に『切韻』を引く（『山谷詩集注』巻一「送王郎」詩の「有弟有弟力持家，婦能養姑供珍鮭」の注など）が、宋代に『広韻』や『集韻』が編纂されて、「切韻」はいま残巻しかない。

小説に関しては以前別稿でも触れたが、黄庭堅が繰り返し使っている典故として指摘された「枕中記」について、

一般的な宋代士人は、流通の少ない『文苑英華』や『太平広記』によって「枕中記」に接したとは考えにくく、蘇軾・黄庭堅・陳師道などの詩集の宋人注からみて、大部分は単行していた『異聞集』により「枕中記」を知ったものと思われる。

という意見もある<sup>6)</sup>が、任淵注に『太平広記』の名が見え（『山谷詩集注』巻六「以团茶洮州緑石研贈無咎文潜」詩の「貝宮胎寒弄明月，天網下罽一日収」の注など）、『郡齋讀書志』にも『直齋書録解題』にも著録されている。『太平広記』は全五百巻、すぐには印刷されなかった経緯もあり、一般的には入手しづらかったのではと思われがちだが、意外に利用できた可能性がある。

『太平広記』は類書だが、任淵は唐代の類書『初学記』や『芸文類聚』も利用しており、『山谷詩集注』巻四「送顧子敦赴河東三首」其三の「虎頭」について、

按歐陽詢芸文類聚引世説，顧愷之為虎頭將軍。然今世説不載，而歷代名画記云，愷之小字虎頭。未知孰是。

案ずるに、歐陽詢『芸文類聚』に『世説』を引いて、「顧愷之，虎頭將軍と為る」

6) 岡本不二明「宋詩にみえる「枕中記」の影響について」、『岡山大学文学部紀要』58号、2012年、27～41頁。



とあるが、いまの『世説』には載せられていない。『歴代名画記』（唐・張彦遠撰）には「愷之，小字は虎頭」とある。どちらが正しいかは、分からない。

とあり、宋代すでに『世説新語』の佚文を類書で見ていることが知られる。

『郡齋讀書志』にも『直齋書録解題』にも見えず、『説郭』に入っている書物がある。『説郭』は、元末明初の陶宗儀による叢書。もと百巻で、他には見えない宋元の筆記小説が多くある。任淵は南宋の人であるから、もちろん『説郭』を利用することはできない。南宋の時代で、『説郭』と同じような叢書を編纂したのが、曾慥である。

曾慥（？～1155？），字は端伯，号は至游子，晋江（今の福建省泉州）の人。文学研究の分野では『楽府雅詞』五巻を編纂した人として知られているが，道教学者として『道枢』を編纂した人としても有名らしい。北宋の大臣曾公亮の子孫で，晩年とくに道教の修行に励み，『道枢』四十二巻のほか，『集神仙伝』『高齋慢録』『通鑑補遺』があり，文学では『宋百家詩選』五十巻，『統選』二十巻がある。『類説』は漢代から宋代までの筆記・小説を集めたものである。

『四庫全書』に『類説』六十巻が著録されている。『類説』は紹興六年（1136）に福建麻沙の書房から出版されたが，麻沙本といえば粗雑で有名なもの，のちに失われ，宝慶年間（1225～1227）に建安の郡齋で重刻された。現在伝わっているのは，明代の重刻本。『郡齋讀書志』には「類説五十六巻」，『直齋書録解題』には「類説五十巻」とある。

『類説』に付されている目録に，以下の書物が挙がっている（『山谷詩集注』に見える書物は下線を付す）。

穆天子伝 漢武帝内伝 楊妃外伝 列士伝 高氏伝 逸士伝 襄陽耆旧  
伝 鄴侯家伝 名臣伝 列仙伝 神仙伝 統仙伝 王氏神仙伝 高道  
伝 西京雜記 病坊雜記 秦京雜記 番禺雜記 大業雜記 玉箱雜記  
青箱雜記 燕北雜記 洞冥記 拾遺記 冥祥記 齊諧記 統齊諧記  
荆楚歲時記 洛陽伽藍記 南部煙花記 河洛記 伝記 景龍文館記 御  
史台記 封氏見聞記 開天伝信記 廬陵官下記 海物異名記 唐宝記  
水衡記 名画記 教坊記 廬山記 諸山記 海棠記 献替記 東官奏  
記 金鑿密記 原化記 搜神記 述異記 広異記 集異記 録異記  
卓異記 乘異記 仇池記 幽明録 幽恠録 芝田録 紀異録 定命録  
唐余録 稽神録 異人録 樹萱録 杜戸録 瀟湘録 羯鼓録 琵琶録  
帰田録 花木録 使遼録 茶録 啓顔録 因話録 談賓録 劇談録

『山谷詩集注』を読むために (3)

賈氏談録 晋公談録 先公雜録 侯鯖録 松窓雜録 明皇録 樂府雜録  
見聞雜録 倦游雜録 東軒雜録 沂公筆録 集古目錄 江南野録 湘山  
野録 雲齋廣録 異聞録 駭聞録 見聞録 三朝聖政録 春明退朝録  
幕府燕閑録 吉凶影響録 伝灯録 漢武故事 開元天寶遺事 明皇十七事  
大中遺事 大唐遺事 南唐近事 荊湖近事 本事詩 博物志 続博物志  
物類相感志 宣室志 博異志 獨異志 徂異志 括異志 灸穀子 玉  
泉子 金華子 淮南子 国史纂異 国史補 後史補 五代史補 史逸  
唐宋遺史 南唐野史 外史壽机 史遺 異聞集 麗情集 資暇集 新  
序 談苑 世説 続世説 伝奇 話林 真誥 摭言 摭遺 爾雅  
集韻 本草 事始 意林 迂書 戦国策 風俗通 甘沢謡 古今註  
蜀本記 齋職制 内史 雜經 黄庭經 神異經 山海經 相馬經  
相鶴經 相牛經 孔子家語 韓詩外伝 七書 呉子 尉繚子 司馬法  
黄石公 三略 六韜 李衛公問对 稽神異苑 朝野僉載 三輔黄图  
南部新書 雲溪友義 酉陽雜俎 北夢瑣言 幽閑鼓吹 法苑珠林 醉鄉  
日月 文心雕龍 顔氏家訓 蘇氏演義 杜陽雜編 齊民要術 尚書故實  
南楚新聞 峰表異録 三水小牘 大唐伝載 聖宋掇遺 青瑣高議 続青  
瑣高議 遯齋閑覧 墨客揮犀 地理新書 修真秘訣 漢上題襟 籍川笑  
林 殷芸小説 盧氏雜記 古樂府 樂府解題 東齋雜記 津陽門詩  
詩品 詩苑類格 続金針格 紀聞談 桂苑叢談 戎幕閑談 秘閣閑談  
牧豎閑談 灯下閑談 翰府名談 国勞閑談 談藪 隋唐嘉話 劉禹錫嘉  
話 茅亭客話 玉堂閑話 玉壺清話 冷齋夜話 大酒清話 漁樵閑話  
古今詩話 欧公詩話 温公詩話 劉貢父詩話 王直方詩話 陳輔之詩話  
西清詩話 墨藪 書斷 書法苑 画品 続画品 書後品 画斷 法  
帖积文 文房四譜 硯譜 香後譜 酒譜 拾遺総類

『四庫全書』所収の『類説』を見たところ、『類説』は各書物からのダイジェスト版である。任淵注に曾慥の『詩選』『集仙伝』『高齋詩話』は見えるが、『類説』の書名は出てこない。『類説』目録に挙がっている書物を、任淵が『類説』に拠って見ていたとは、必ずしも言えないが、いくつか調べてみたところ、『類説』でしか見られない文もあった。たとえば、『山谷詩集注』巻八の「謝景叔惠冬笋雍酥水梨三物」詩の「見他桃李憶故園，嚙猿応残遶窓竹」の注にある「古今詩話，唐人詩曰，見他桃李樹，思憶故園春」は、いま

『類説』巻五十六『古今詩話』に見える。また『唐宋遺史』も、任淵が引用する二か所は、ともにいま『類説』にしか見えない。

『郡斎讀書志』『直斎書録解題』は小説類のほか、芸術類と医家類の書物も少ないようで、その点、『類説』目録は任淵の当時、これらの書物が流通していたことを裏付ける資料となるだろう。

### 三、仏典について

『郡斎讀書志』『直斎書録解題』『類説』にもあまり載らず、しかし任淵がよく利用しているのが、仏典である。それは黄庭堅が仏教、とくに禅宗と関係が深かったためである。

倉田淳之助氏は『黄庭堅』（漢詩大系 18, 1967年、のち漢詩選 12, 1997年、集英社）の「解説」で、黄庭堅と仏教との関係について、次のように述べている。

仏教については、（江西）隆興府の黄竜寺に慧南（1002-1069）が開いた黄竜派の禅宗を、その弟子の晦堂祖心（1025-1100）から学び、晦堂の弟子の死心悟新（1043-1114）・仏寿惟清（-1117）とは法眷として交った。又最後の宜州では崇寧寺の僧とも親しくした。山谷は初の妻孫氏、後妻の謝氏が早逝して後四十歳の時、酒食淫欲を断つ発願文を書いている。酒肉戒は晩年破れたし、子の相も生れていると責める向もあるが、三月に誓を立てて、相は四十歳中に生れたのである。以後正妻は持たなかった。そういう事以外に、再度流罪に処せられながら、その詩は最後まで悲愁の字を著けず、明るさを失わなかったことは、大いに仏教信仰と関係があると思われる。わが五山僧殊に黄竜派の京都、建仁寺の僧が山谷詩集を愛読したのは、仏教思想を含む為であることはいうまでもなく、又山谷の詩に頻繁に引かれる莊子の思想、人間の苦を去って虚無自然に導こうとするところは、仏教の解脱と相似た点のあることも忘れてはならない。

黄庭堅が「発願文」を書いたのは、神宗の元豊七年（1084）三月、四十歳のとき。監德州徳平鎮（今の山東省商河県徳平鎮）という官職にあった。家族は故郷の分寧に残し、単身での赴任である。徳州へ向かう途中、武寧県（今の江西省南昌府）の延恩寺で「贈鄭交（鄭交に贈る）」という詩を作った。親交のあった惟清上人が若いころ修行した延恩寺に来るというので待っていたが、会えなかったので寺の隣に隠棲していた鄭交の草堂の壁に、

詩を残したのである。

高居大士是龍象	高居の大士は是れ龍象
草堂丈人非熊羆	草堂の丈人は熊羆に非ず
不逢壞衲乞香飯	かいのう こうはん 壞衲の香飯を乞うに逢わずして
唯見白頭垂釣糸	唯だ 白頭の釣糸を垂るに見ゆ
鴛鴦終日愛水鏡	鴛鴦 終日 水鏡を愛し
菡萏晚風凋舞衣	かんたん せふすけ 菡萏 晚風 舞衣を凋ます
開徑老禪來煮茗	徑を開いて老禪来たりて茗を煮
還尋密竹逕中歸	還た密竹の逕中を尋ねて歸る

### 【通釈】

高居（延恩寺）に御座される高僧（惟清）は龍象にほかならず、草堂に住まうご老人（鄭交）は熊でも羆でもない方だ。僧衣で香飯を乞食に行った方（惟清）に会うことはできなかったが、釣り糸を垂れる白髪の方（鄭交）に会えた。池の鴛鴦は日かな水鏡（静かな水面）に浮かび、蓮の花は夕方の風に吹かれて舞衣（花）をしほませた。小路をぬけて老僧（法安）がやってきて茶を煮てくださり、また竹林を抜けて帰っていかれた。

「熊羆に非ず」とは、周の西伯（文王）が狩りに出るにあたって占いをさせたところ、「獲物は龍でもなく麕でもなく、虎でもなければ羆でもない。得るものは霸王の補佐であらう」と言われ、果たして涓水のほとりで呂尚（太公望）に出会った故事。「白頭 釣糸を垂る」は、鄭交を太公望に見立てて、天子を補佐すべき人材であることを言う。

この故事を含め、任淵が詳細な注をつけている。

### 【詩題】

山谷有招清公詩跋云、草堂鄭交処士、隱処小塘、芙蓉盛開、使鷄伏鴛鴦卵、與人馴狎不驚畏。老禪延恩長老法安師、懷道遯世。清公少時、蓋依之數年。今觀跋意、即此詩、但題不同爾。鄭交字子通、見於山谷書尺及題跋。

山谷に「清公を招く」詩の跋があり、「草堂は鄭交処士の隱棲する場所で、小さな池では蓮の花が咲きみだれ、鷄が鴛鴦の卵を温めているし、人に馴れて恐れも驚きもしない。延安寺の長老・法安禪師は俗世を逃れてここで仏道に精進しておられる。

……惟清公は若いころ法安禪師のもとで数年ほど修行してということだ」という。今この跋の意から考えると、「清公を招く」詩とはこの詩のことで、ただ詩題が違っただけである。鄭交は、字は子通。山谷の書尺及び題跋にその名がみえる。

【高居大士是龍象，草堂丈人非熊羆】

大士謂靈源叟惟清，清蓋晦堂之法嗣。山谷与欧陽元老帖云，清師歸所受業院武寧之高居，想甚得所也。武寧属洪州。蓮經曰，文殊師利語彌勒及諸大士，如我惟付，今仏世尊，欲説大法。伝燈録達磨伝曰，波羅提法中龍象。按智度論云，龍象言其力大。龍水行中力大，象陸行中力大，故今以負荷大法者比之龍象。史記齊世家曰，呂尚年老，以漁釣于周西伯。西伯將獵，卜之曰，所獲非龍・非彫・非虎・非羆，所獲霸王之輔。果遇於渭水之陽。載与俱歸，立為師。按六韜以非虎為非熊。

高居大士 大士は靈源長老の惟清のこと，惟清は晦堂の法嗣である。山谷の「欧陽元老に与うる帖」に「惟清がかつて修行した武寧の高居に戻られるというのは，大變ふさわしいことだと思ふ」とある。武寧は洪州に属す。『蓮經』に「文殊師利，彌勒及び諸の大士に語らく，『我が惟付するが如き，今 仏・世尊，大法を説かんと欲す』」とある。『伝燈録』達磨伝に「波羅提の法中に龍象あり」とある。『智度論』に「龍象とは力の大きなものをいう。龍は水中にあって力大きく，象は陸上にあって力大きいものである」とあるので，ここでは偉大な仏法を背負う者を龍や象にたとえたのであろう。『史記』齊世家に「年老いた呂尚は釣りをしながら周の西伯に用いられる機会をうかがっていた。西伯が狩りに出るにあたって占いをさせたところ，『狩の獲物は龍でもなく彫でもなく，虎でもなければ羆でもない。得るものは霸王の補佐であろう』と言われ，占い通り西伯は渭水のほとりで呂尚に出会った。そこで彼を輿に乗せてともに帰り，師とした」とある。『六韜』は「虎に非ず」を「熊に非ず」に作る。

【不逢壞衲乞香飯，唯見白頭垂釣糸】

上句謂清公未至延恩，下句指鄭交。四分律云，一切上色衣不得畜，当壞作迦沙色。智度論云，五比丘曰，仏当著何等衣。仏言，応著衲衣。金剛經曰，爾時世尊食時，著衣持鉢，入舍衛大城乞食。維摩經曰，化菩薩以滿鉢香飯与維摩詰。老杜詩，江辺老病雖無力，強擬晴天理釣糸。

上句は惟清がいまだ延恩寺に来ないことをいい，下句は鄭交を指す。『四分律』に「すべての上色の衣は所有してはならない。壞色を袈裟の色とするのだ」とある。『智度論』には「五人の出家者が『我らはどのような衣を身に着るべきか』という

と、仏が「衲衣（つぎはぎして作った衣）を着るべきである」と答えたとする問答がある。『金剛經』に「そのとき世尊は朝はやく衣を着け、鉢を持って舍衛大城（シュラーヴァステイー）を托鉢して歩かれた」とある。また『維摩經』に「化菩薩（菩薩の分身）は食べ物で満たされたその鉢を維摩詰に差し出した」とある。老杜（杜甫）の詩に「江辺 老病して力無きと雖も、強いて晴天に釣糸を理すに擬す」とある。

【鴛鴦終日愛水鏡，菡萏晚風凋舞衣】

襄陽記曰、司馬德操為水鏡。晋書樂広伝、衛瓘曰、此人之水鏡也。趙嘏詩曰、紅衣落尽渚蓮愁。書曰、胤之舞衣。

『襄陽記』に「司馬德操は水鏡と呼ばれた」とある。『晋書』樂広伝に衛瓘が「此れ人の水鏡なり」と述べたとある。趙嘏の詩に「紅衣 落ち尽して 渚蓮愁う」とある。『書』に「胤という人の作った舞衣」とある。

【開徑老禪來煮茗，還尋密竹逕中歸】

江淹擬陶淵明詩云、開徑望三益。老杜寄賛上人詩云、柴荆具茶茗，逕路通林丘。謝靈運詩，連巖覺路塞，密竹使徑迷。

江淹の「陶淵明に擬す」詩に「徑を開きて三益を望むとある。老杜の「賛上人に寄す」詩に「柴荆 茶茗を具え，逕路 林丘に通ずとある。謝靈運の詩に「連巖 路の塞がるかと覚え，密竹は逕を迷わしむ」とある。

この詩は惟清上人に関係するのでとくに顕著だが、仏典がいくつも引用されている。黄庭堅の詩文を読む際に、仏典と仏教に対する知識および理解を欠くことは出来ない、と深く感ずる。

そもそも山谷の号が、舒州（今の安徽省）の懷寧県三祖山山谷寺に由来するのである。神宗の元豊三年（1080）、三十六歳、この年の初めに北平大名府（今の河北省大名県）での教授の職を辞め、都へ行き、官を知吉州太和県（今の江西省泰和县）に改められた。秋に家族三十余人を連れて任地へ行く途中、各地で知人や先輩を訪ね、十月、舒州懷寧県（今の安徽省潜山県）の三祖山山谷寺を訪ね、「題山谷石牛洞（山谷の石牛洞に題す）」詩を作った。

司命無心播物      司命 無心に物を播<sup>し</sup>き  
祖師有記伝衣      祖師 <sup>しるし</sup>記有りて衣を伝う

白雲横而不度　　白雲　横たわりて度<sup>わた</sup>らず  
高鳥倦而猶飛　　高鳥　倦みて猶お飛ぶ

### 【通釈】

司命の神は無心に万物を生み育て、祖師（僧璨）<sup>しるし</sup>に記として法衣が伝えられた。白雲は山にたなびき、空高く鳥はどこまでも飛んでゆく。

三祖山に石牛洞があり、伏せる牛の形をした岩があった。黄庭堅が自らを山谷道人と号するようになったのは、友人の画家李公麟（1049～1106）がその石牛の上に坐す彼の姿を画に描いたことによる、という。

任淵の注によれば、懷寧県の北に潜山があり、九天司命真君の祠がある。山谷寺は県の西に在り、禪宗の第三祖僧璨（？～606）の塔がある。『景德伝灯録』達磨伝に、「袈裟を慧可に授けて『内には法印を伝えて証心を契り、外には袈裟に付して宗旨を定めよう。あなたは今この衣を受け、用いてその化の礎<sup>さまたげ</sup>なきを明らかにせよ。私が滅して二百年後、衣はもう伝わらないだろうが、法は沙界にあまねく広まるだろう』と言った」とあり、禪宗の師祖達磨は第二祖慧可に、また慧可は第三祖僧璨に衣を授けた。沙界はガンジス川の砂のように無数にある世界の意。

「題山谷石牛洞」は、「発願文」を書く四年前の詩である。黄庭堅の故郷である洪州分寧は、臨済宗黄竜派の発祥の地で、若い頃から禪宗に親しんでいた。呂本中が「江西詩社宗派図」を作ったのも禪の宗派に倣ったものであるし、黄庭堅の詩風と臨済宗の禪風が符号するという研究もある<sup>7)</sup>。

任淵の『山谷詩集注』二十巻で、八千余に及んだ全項目のうち、仏典は約三百項目あった。伝統的な四部分類に「釈家類」があるが、任淵が利用した仏典はそこに見あたらないものも多い。そこで「SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース 2015版」を使用して、語句を検索した。『大正新脩大蔵経』（大正一切経刊行会、大正十三年～昭和九年）は、北宋時代に蜀（四川省）で開版された漢訳大蔵経『開宝蔵』を、韓国や日本に伝わるテキストを底本に刊行したもの。太祖・太宗の時代（開宝四年～太平興国二年）に蜀で版木が彫られ、太平興国八年（983）に都の開封に建てられた「印経院」で印刷され、功德事業として西夏・高麗・日本など近隣諸国にも下賜された。黄庭堅や任淵も利用できた可能性が

7) 周裕谿「禪門宗風と宋詩派別」、『宋代文学研究叢刊』創刊号、1995年3月、127～144頁、参照。

あるが、一部の仏典が繰り返し引用されていることから、単行で出された仏典を読んでいた可能性も高い。

以前別稿でも仏典を調べたところ、古訳にヒットすることが多かった。そのため、

仏典の翻訳（漢訳）は、おなじ經典に複数の翻訳があることがあり、初期の漢訳はニルヴァーナ（涅槃）を「無為」と訳すなど、先行する中国語文献の言葉や思想を借りた部分があった。唐代に玄奘が仏典を持ち帰ったのを機にあらためて翻訳に取り組んだ際、訳せないものは音写訳にする方針で新訳を出したが、その後も古訳のほうが読まれることが多かった、という。任淵注で引用されている語句を文字列で検索すると、古訳のほうでヒットするので、そうした状況が確認できる。

としたが、今回、二十巻を全部調べた結果、新訳仏典もいくつか出てきた。

よく使われているものに、「贈鄭交」詩の注にもあった『伝灯録（景德伝灯録）』や『維摩経（維摩詰所説経）』などがあるが、ほかにどんな仏典が引用されているか、まとめると以下のようなものがある<sup>8)</sup>（カッコ内は任淵注で使われている仏典名）。

- 本縁部 『大方便仏報恩経』（大方便報恩経）、失訳。（大正蔵 No. 156）
- 般若部 『金剛般若波羅蜜経』（金剛経）、後秦・鳩摩羅什訳。（大正蔵 No. 235）  
『般若波羅蜜多心経』（心経）、唐・玄奘訳。（大正蔵 No. 251）
- 法華部 『妙法蓮華経』（蓮経）、後秦・鳩摩羅什訳。（大正蔵 No. 262）
- 華嚴部 『大方広仏華嚴経』（華嚴経）、東晋・仏駄跋陀羅訳。（大正蔵 No. 278）
- 宝積部 『大宝積経』（宝積経）、唐・菩提流志訳。（大正蔵 No. 310）  
『仏説阿弥陀経』（阿弥陀経）、後秦・鳩摩羅什訳。（大正蔵 No. 366）  
『大般涅槃経』（涅槃経）、北凉・曇無讖訳。（大正蔵 No. 374）  
『集一切福德三昧経』（集福德三昧経）、後秦・鳩摩羅什訳。（大正蔵 No. 382）
- 大集部 『維摩詰所説経』（維摩経）、後秦・鳩摩羅什訳。（大正蔵 No. 475）
- 経集部 『超日明三昧経』（超日経）、西晋・聶承遠訳。（大正蔵 No. 638）  
『首楞嚴三昧経』（楞嚴経）、後秦・鳩摩羅什訳。（大正蔵 No. 642）  
『仏説観仏三昧海経』、東晋・仏陀跋陀羅訳。（大正蔵 No. 643）  
『解深密経』、唐・玄奘訳。（大正蔵 No. 676）

8) 複数の仏典にヒットするもの、一部の宋代以降の文献（宋代までの文献が散佚して引用されたものが残ったと考えられる）は除いた。



- 『四十二章經』，後漢・迦葉摩騰共法蘭訳。(大正蔵 No. 784)
- 『大方広円覚修多羅了義經』(円覚經)，唐・仏陀多羅訳。(大正蔵 No. 842)
- 密教部 『守護国界主陀羅尼經』(陀羅尼經)，唐・般若共牟尼室利訳。(大正蔵 No. 997)
- 律部 『四分律』，後秦・仏陀耶舎訳。(大正蔵 No. 1428)
- 釈經論部 『大智度論』(智度論)，後秦・鳩摩羅什訳。(大正蔵 No. 1509)
- 『遺教經論』(遺教經)，天親菩薩造・陳真諦訳。(大正蔵 No. 1529)
- 毘曇部 『阿毘達磨大毘婆沙論』(婆娑論・大毗婆沙論)，唐・玄奘訳。(大正蔵 No. 1545)
- 經疏部 『新華嚴經論』(華嚴論・華嚴合論)，唐・李通玄撰。(大正蔵 No. 1739)
- 諸宗部 『樂邦文類』，宋・宗曉編。(大正蔵 No. 1969A)
- 『大慧普覺禪師語録』，宋・濶聞編。(大正蔵 No. 1998A)
- 『黃檗山斷際禪師伝心法要』(伝心法要)，唐・裴休集。(大正蔵 No. 2012A)
- 『禪源諸詮集都序』(禪原集序)，唐・宗密述。(大正蔵 No. 2015)
- 『宗鏡録』，宋・延壽集。(大正蔵 No. 2016)
- 史伝部 『高僧伝』，梁・慧皎撰。(大正蔵 No. 2059)
- 『景德伝燈録』(伝燈録)，宋・道原撰。(大正蔵 No. 2076)

#### 四、經史子集の書

經史子集の書物はもちろん多い。ただ集部については、別集の書名が挙がることはほとんどなく、総集の『楚辭』『文選』『玉台新詠』『樂府詩集』(とくに『文選』)に収録されている作品を、その作者とともに挙げていることが多い。従って書物のリストには、集部の書はとても少ないように見えるが、実際には用例として多数の作品を任淵は注に引用している。

書物を一覧してみると、史部の伝記類・地理類と子部の芸術類・小説家類が、豊富な印象を受ける。これは黄庭堅の詩の内容、傾向と関わることであろう。

黄庭堅の詩について、倉田淳之助氏は次のように言う<sup>9)</sup>。

9) 倉田淳之助注『黄庭堅』「解説」, 21頁。

『山谷詩集注』を読むために (3)

宋詩の代表蘇黄の作品に、唐詩に見るような自然描写がないということは注意される一つである。劉宋の謝靈運あたりから発展して来た自然憧憬の心は、唐に入っては益々濃く、叙景の詩或は句が多く、唐詩では景と情を対立せしめて写すのを定形とした。恰も山水画が唐に発達し、山水中に人間を配して、自然と人間との融合・平和を現すのとその軌を一つにするところがあった。……(山谷の)表現は人を中心にし人事に随伴せしめるように傾き、自然描写には冷淡である。換言すれば心に受取る自然で、眼に映ずる自然を現すのではない。人事を、思想を、理知的に現そうとする傾向の強い詩として当然の帰結であろう。

これについて、「なるほど、唐詩が山水画であるとするならば、山谷の詩は文人画のようである。自然そのままを写實的に描写するのではなく、付託されたイメージを緻密な計算のもとに配置していくようである」<sup>10)</sup>と思う。人物について、それが古典籍に出てくる人や故事を踏まえていれば、伝記類・地理類・小説家類の書物が参考になるであろうし、蘇軾ら現実社会で交流のあった人々と筆や硯などの文房具や茶を贈りあい、画を鑑賞しながら詩を作りあい、といった活動が、芸術家類の書物が多く引用されることにつながるであろう。

以下、今回の調査で分かった書物である。( ) は任淵注で使われている書名。分類と配列は、『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』を基準とし、『四庫全書総目提要』、中国古籍総目編纂委員会『中国古籍総目』(中華書局・上海古籍出版社、2012年)で補った。また『群齋讀書志』『直齋書録解題』『文選』『類説』にあるかどうかを示した。

今回の調査で判明しなかった書物が、二十点ほどある。書物なのか文献なのかもよく分からず、今後、訳注作業を進めながら慎重に調査し、補うこととしたい。

【経部】					
		郡齋	直齋	文選	類説
易類	『周易』	○	○		
	『東坡易伝』, 宋・蘇軾撰。	○	○		
書類	『尚書』	○	○		

10) 拙論「黄庭堅の詩路(詩的論理)について」, 慶應義塾大学日吉紀要『中国研究』, 日吉紀要刊行委員会, 2018年3月, 1~41頁, で黄庭堅の詩で人物がどのように詠われるか論じたことがある。引用部分は, 13頁。

	『尚書大傳』，漢・鄭玄注。	○	○		
	『汲冢周書』，晉・孔晁撰。		○		
	『尚書故實』，唐・李綽撰。	○			○
詩類	『詩』	○	○		
	『毛詩草木鳥獸虫魚義疏』，唐・陸璣撰。	○	○		
	『韓詩外傳』，漢・韓嬰撰。	○	○		○
禮類	『儀禮』	○			
	『三禮圖』(禮圖)，漢・鄭玄撰。	○	○		
	『周禮』	○	○		
	『禮記』	○	○		
春秋類	『春秋』	○	○		
	『春秋左傳』(左傳)	○	○		
	『春秋公羊傳』(公羊傳)	○	○		
	『春秋穀梁傳』(穀梁傳)	○	○		
	『春秋說題辭』【散逸】，魏・宋均注。				○
	『春秋感精符』【散逸】，魏・宋均注。				○
	『春秋考異郵』【散逸】，魏・宋均注。				○
	『春秋後語』【散逸】，晉・孔衍撰。				
四書類	『孟子』	○	○		
	『論語』(魯論)	○	○		
	『論語正義』，魏・何晏注。	○			
孝經類	『孝經』	○	○		
諸經總義類	『五經要義』，劉宋・雷次宗撰。				
小學類	『爾雅』，漢・郭璞注。	○	○		○
	『方言』，漢・揚雄撰。	○	○		
	『積名』，漢・劉熙撰。		○		
	『廣雅』，魏・張揖撰。	○	○		
	『埤蒼』，魏・張揖編。				○
	『說文解字』，漢・許慎編。	○	○		
	『字林』【散逸】，晉・呂忱編。		○		
	『急就章』，漢・史游撰。	○	○		
	『玉篇』，梁・顧野王編。	○	○		
	『切韻』【散逸】，隋・陸法言撰。				
	『集韻』，宋・丁度等奉勅撰。	○	○		○

## 『山谷詩集注』を読むために (3)

	『礼部韻略』(韻書), 宋・丁度等奉勅撰。	○	○		
<b>【史部】</b>					
正史類	『史記』, 漢・司馬遷撰。	○	○		
	『漢書』, 漢・班固撰。	○	○		
	『漢書音義』【散逸】, 隋・蕭該撰。			○	
	『後漢書』, 劉宋・范曄撰。	○	○		
	『統漢志』, 晉・司馬彪撰。		○		
	『三国志』, 晉・陳寿撰。宋・裴松之注。	○	○		
	『晋書』, 唐・房喬等奉勅撰。	○	○		
	『宋書』, 梁・沈約撰。	○	○		
	『南齊』(書齊書, 南書), 梁・蕭子顯撰。	○	○		
	『梁書』, 唐・姚思廉奉勅撰。	○			
	『隋書』, 唐・魏徵等奉勅撰。	○	○		
	『南史』, 唐・李延寿撰。	○	○		
	『北史』, 唐・李延寿撰。	○	○		
	『旧唐書』, 晉・劉昫等奉勅撰。	○	○		
	『新唐書』(唐書), 宋・歐陽修宋祁等奉勅撰。	○	○		
	『新五代史』(五代史), 宋・歐陽修撰。		○		
編年類	『資治通鑑』, 宋・司馬光撰。	○	○		
	『神宗實録』【散逸】	○	○		
	『哲宗實録』【散逸】	○	○		
古史類	『統晋陽秋』【散逸】, 劉宋・檀道鸞撰。			○	
別史類	『東觀漢記』, 漢・劉珍等撰。			○	
	『魏略』【散逸】, 魏・魚豢撰。			○	
	『晋紀』【散逸】, 晉・干宝撰。			○	
	『建康實録』, 唐・許嵩撰。	○	○		
	『唐余録』【散逸】, 宋・王暉奉勅撰。				
	『十二国史』【散逸】				
雜史類	『国語』		○		
	『戦国策』, 漢・高誘注。	○	○		○
	『古今逸士伝』(逸士伝)【散逸】, 晉・皇甫謐撰。				○
	『南越志』【散逸】, 劉宋・沈懷遠撰。		○		○
	『国史纂異』				○
	『渚宮旧事』, 唐・余知古撰。	○			

	『国史補』, 唐・李肇撰。	○	○		○
	『邵氏聞見録』, 宋・邵伯溫撰。	○	○		
載記類	『吳越春秋』, 漢・趙擘撰。	○			
	『華陽国志』, 晉・常璩撰。	○	○		
	『鄴中記』, 晉・陸翹撰。		○		
伝記類	『晏子春秋』	○	○		
	『襄陽耆旧伝』, 劉宋・習鑿齒撰。		○		○
	『列女伝』, 漢・劉向撰。	○	○		○
	『高士伝』, 唐・皇甫謐撰。	○	○		○
	『閩川名士伝』, 唐・黄璞撰。	○	○		
	『景龍文館記』, 唐・武平一撰。		○		○
	『開元天宝遺事』, 五代・王仁裕撰。	○	○		○
	『王沂公言行録』【散逸】, 宋・王岷撰。		○		
	『同安志』【散逸】, 宋・錢紳撰。		○		
	『鷄林志』【散逸】, 宋・王雲撰。	○			
	『西征記』, 宋・盧襄撰。				
	『禪林僧宝伝』(僧宝伝), 宋・覺範慧洪撰。	○	○		
時令類	『秦中歲時記』, 唐・李焯撰。		○		○
地理類	『三輔黄図』, 漢・無名氏撰。	○	○		○
	『周処風土記』【散逸】, 晉・周処撰。			○	
	『襄陽記』【散逸】, 晉・習鑿齒撰。			○	
	『交州記』【散逸】, 晉・劉欣期撰。			○	
	『永嘉郡記』, 劉宋・鄭緝之撰。				
	『太平寰宇記』(寰宇記), 宋・樂史撰。		○		
	『輿地広記』, 宋・歐陽忞撰。	○	○		
	『水経注』, 後魏・酈道元撰。		○		
	『異物志』【散逸】, 漢・楊孚撰。			○	
	『述征記』【散逸】, 晉・郭緣生撰。			○	
	『荊州記』【散逸】, 劉宋・盛宏之撰。			○	
	『廬山記』, 宋・陳舜俞撰。	○	○		○
	『洛陽伽藍記』(伽藍記), 北魏・楊衒之撰。	○	○		○
	『嶺表録異』, 唐・劉恂撰。				
	『海物異名記』, 南唐・陳致雍撰。		○		○
	『東京記』【散逸】, 宋・宋敏求撰。	○	○		

## 『山谷詩集注』を読むために (3)

	『零陵記』, 宋・陶岳撰。	○			
	『廬阜雜記』, 宋・孫惟信撰。		○		
	『華山記』, 闕名撰。		○		
	『京兆記』, 闕名撰。				
	『三秦記』【散逸】 <small>辛某撰。</small>			○	
職官類	『翰林志』, 唐・李肇撰。	○	○		○
	『御史台記』, 唐・韓琬撰。	○	○		○
	『金坡遺事』, 宋・錢惟演撰。	○	○		○
	『統翰林志』, 宋・蘇易簡撰。		○		○
政書類	『漢官儀』【散逸】 <small>漢・応劭撰。</small>		○		
	『漢官典職儀式選用』(漢官典職)【散逸】 <small>漢・蔡質撰。</small>		○		
	『漢旧儀』(衛宏漢儀)【散逸】 <small>漢・衛宏撰。</small>		○		
	『通典』, 唐・杜佑撰。	○	○		
	『国朝会要』【散逸】		○		
書目類	『別録』, 漢・劉向撰。			○	
	『七略』, 漢・劉歆撰。			○	
史評類	『史通』, 唐・劉知幾撰。	○	○		
<b>【子部】</b>					
儒家類	『孔子家語』, 魏・王肅注。	○	○		○
	『荀子』	○	○		
	『孔叢子』, 漢・孔鮒撰。	○	○		
	『新語』, 漢・陸賈撰。			○	
	『塩鉄論』, 漢・桓寬撰。	○	○		
	『桓譚新論』(桓子新論)【散逸】 <small>漢・桓譚撰。</small>			○	
	『新書』, 漢・賈誼撰。	○			
	『新序』, 漢・劉向撰。	○	○		○
	『說苑』, 漢・劉向撰。	○	○		○
	『法言』, 漢・揚雄撰。		○		
	『袁子正書』(袁子)【散逸】 <small>晋・袁準撰。</small>			○	
	『文中子』, 隋・王通撰。			○	
兵家類	『六韜』	○	○		○
	『孫子』	○	○		
法家類	『管子』	○	○		
	『韓子』(韓非子)	○	○		

農家類	『齊民要術』，後魏・賈思勰撰。	○	○		○
	『四時纂要』，唐・韓鄂撰。	○	○		
医家類	『本草經』【散逸】			○	○
	『本草經集注』【散逸】，梁・陶弘景撰。				
	『新修本草』（唐本草），唐・蘇敬等奉勅撰。				
	『本草拾遺』（陳藏器本草），唐・陳藏器撰。				
	『圖經本草』【散逸】，宋・蘇頌撰。	○			
術数類	『太玄經』，漢・揚雄撰。	○	○		
	『易林』，漢・焦延壽撰。	○	○		
芸術類	『古画品録』（画品），南齊・謝赫撰。	○			○
	『書斷』，唐・張懷瓘編。		○		○
	『法書要録』，唐・張彥遠撰。				
	『歷代名画記』（名画記・画記），唐・張彥遠撰。		○		○
	『墨薮』，唐・韋瓘撰。				○
	『宋朝名画評』（名画評），宋・劉道醇撰。	○	○		
	『圖画見聞誌』，宋・郭若虛撰。		○		
	『書史』，宋・米芾撰。		○		
	『法書苑』，宋・周越撰。		○		
	『相鶴經』，宋・浮丘公撰。	○	○		
	『樂府雜録』，唐・段安節撰。	○			○
	『文房四譜』，宋・蘇易簡撰。	○	○		○
	『茶經』，唐・陸羽撰。	○	○		
	『茶録』，宋・蔡襄撰。	○	○		○
	『煎茶水記』，唐・張又新撰。	○	○		
雜家類	『慎子』		○		
	『呂氏春秋』，漢・高誘注。	○	○		
	『淮南子』，漢・劉安撰。	○			○
	『扶南異物志』（異物志）【散逸】，吳・朱應編。				
	『劉子』，北齊・劉昼撰。	○	○		
	『顏氏家訓』，北齊・顏之推撰。		○		○
	『古今注』，晉・崔豹撰。		○		○
	『統古今注』【散逸？】 唐・周蒙撰。				
	『論衡』，漢・王充撰。	○	○		
	『風俗通義』（風俗通），漢・應劭撰。	○	○		○

## 『山谷詩集注』を読むために (3)

	『春明退朝録』, 宋・宋敏求撰。	○	○		○
	『夢溪筆談』, 宋・沈括撰。	○	○		
	『冷齋夜話』, 宋・釈惠洪撰。		○		○
	『倦游録』【散逸】, 宋・張師正撰。	○			
	『先公談録』【散逸】, 宋・李宗諤撰。		○		○
類書類	『初学記』, 唐・徐堅等奉敕撰。	○	○		
	『白氏六帖』, 唐・白居易編。		○		
	『事類賦』, 宋・呉淑撰。		○		
小説家類	『神異経』, 漢・東方朔撰。		○		○
	『十洲記』, 漢・東方朔撰。		○		○
	『西京雜記』, 漢・劉歆撰。				○
	『三輔決録』【散逸】, 漢・趙岐撰, 晋・摯虞注。			○	
	『三輔旧事』【散逸】, 漢・趙岐等撰。			○	
	『拾遺記』, 晋・王嘉撰。	○	○		○
	『博物志』, 晋・張華撰。	○	○		○
	『世説新語』(世説), 劉宋・劉義慶撰。	○	○		○
	『異苑』, 劉宋・劉敬叔撰。			○	
	『幽明録』, 劉宋・劉義慶撰。				○
	『録異伝』, 闕名撰。				
	『朝野僉載』, 唐・張鷟撰。		○		○
	『樹萱録』, 唐・劉焯撰。	○	○		○
	『炙轂子』, 唐・王叡撰。				○
	『明皇雜録』, 唐・鄭処誨撰。	○	○		○
	『因話録』, 唐・趙璘撰。	○			○
	『雲溪友議』, 唐・范攄撰。	○	○		○
	『唐摭言』, 唐・王定保撰。	○	○		○
	『異聞集』, 唐・陳翰撰。	○	○		○
	『開天伝信記』(開元伝信記), 唐・鄭紫撰。	○	○		○
	『酉陽雜俎』, 唐・段成式撰。	○	○		○
	『啓顔録』, 唐・侯白撰。		○		○
	『北里志』, 唐・孫棨撰。		○		
	『古今五行記』, 唐・闕名撰。				
	『東陽夜怪録』, 唐・王洙撰。				
	『南唐近事』, 宋・鄭文宝撰。	○	○		○



	『北夢瑣言』，宋・孫光憲撰。	○	○		○
	『太平廣記』(廣記)，宋・李昉等奉敕撰。	○	○		
	『談苑』【散逸】，宋・楊億述，宋・黃鑑錄。	○	○		○
	『青箱雜記』，宋・吳處厚撰。	○	○		○
	『唐語林』(語林)，宋・王讜撰。	○	○		
	『穆天子傳』，晉・郭璞注。	○	○		○
	『漢武故事』，漢・班固撰。	○			○
	『搜神記』，晉・干寶撰。				○
	『統搜神記』，晉・陶潛撰。				
	『劇談錄』，唐・康駢撰。	○			○
	『隋唐嘉話』，唐・劉餗撰。		○		○
	『裴劍俠傳』，唐・裴劍撰。		○		○
	『唐宋遺史』【散逸】，宋・詹玠撰。				○
	『談藪』，宋・龐元英撰。		○		○
	『盧氏雜說』，唐・盧言撰。		○		
	『統玄怪錄』，唐・李復言撰。	○			
	『紀異錄』，宋・秦再思撰。	○			
積家類	『法苑珠林』，唐・道世撰。				○
	『華嚴合論』(華嚴論)，唐・李通玄撰。				
	『祖庭事苑』，宋・陸庵善卿撰。				
	『廣燈錄』，宋・李遵勗編。	○			
	『積氏要覽』，宋・積道誠撰。	○			
	『景德傳燈錄』(傳燈錄)，宋・道原撰。				○
道家類	『老子』	○	○		
	『列子』	○	○		
	『莊子』	○	○		
	『文子』，漢・尹文撰。	○	○		
	『列仙傳』，漢・劉向撰。	○	○		○
	『抱朴子』，晉・葛洪撰。		○		○
	『神仙傳』，晉・葛洪撰。	○			○
	『真誥』，梁・陶弘景撰。	○	○		○
	『黃庭內景經』				○
	『符子』【散逸】，晉・符朗撰。				
	『統仙傳』，南唐・沈汾撰。		○		○

## 『山谷詩集注』を読むために (3)

	『陰符経』	○	○		
	『集仙伝』【散逸】、宋・曾慥撰。		○		
<b>【集部】</b>					
楚辭類	『楚辞』、漢・王逸編。	○	○		
別集類	『脩水集』、宋・黄庭堅撰。				
	『宋景文筆記』、宋・宋祁撰。		○		
	『欒城集』、宋・蘇轍撰。	○			
総集類	『文選』、梁・蕭統撰。	○	○		
	『玉台新詠』、陳・徐陵輯。	○	○		
	『唐文粹』、宋・姚鉉編。	○	○		
	『樂府解題』、唐・呉兢撰。				○
	『樂府詩集』、宋・郭茂倩撰。	○	○		
	『皇宋詩選』(詩選)【散逸】、宋・曾慥編。	○	○		
詩文評類	『詩品』、梁・鍾嶸撰。		○		○
	『本事詩』、唐・孟啓撰。	○	○		○
	『王直方詩話』【散逸】、宋・王直方撰。	○			○
	『古今詩話』【散逸】、宋・李昉撰。				○
	『西清詩話』、宋・蔡條撰。		○		○
	『洪駒父詩話』【散逸】、宋・洪芻撰。				
	『詩苑類格』【散逸】、宋・李淑撰。	○	○		○
詞曲類	『花間集』、後蜀・趙崇祚編。		○		

## 五、詩人（文章家を含む）について

以前別稿で、巻一だけで六十名ほどの作者が挙げたが、二十巻全体では百九十名ほどになった。唐以前は、ほとんど『文選』（『玉台新詠』『樂府詩集』『楚辞』も）所収の詩人である。（ ）は字号。生卒年は主に『歴代人物年里碑伝綜表』（姜亮夫纂定、陶秋英校、中華書局、1976年）を参考にした。

**【戦国】**

屈平（原）、前343～前277。

宋玉、前298?～前222?

**【漢】**

賈誼、前201～前169。

劉安、前179～前122。

司馬相如（長卿）、前179～前117。

東方朔, 前 154 ~ 前 71。

李陵, ? ~ 前 74。

司馬遷 (子長), 前 145 ~ 前 86。

蘇武 (子卿), 前 140 ~ 前 60。

枚乘, ? ~ 前 140。

劉向, 前 77 ~ 前 6。

班婕妤, ? ~ ?。

揚雄, 前 53 ~ 18。

莊忌, ? ~ ?。前漢の人。

班固 (孟堅), 32 ~ 92。

王褒 (王子淵), ? ~ 前 61。

傅毅 (武仲), ? ~ 90。

張衡 (平子), 78 ~ 139。

王逸, ? ~ ?, 126 年頃在世。

蔡邕, 132 ? ~ 192。

楊修 (德祖), 175 ~ 219。

淮南小山, ? ~ ?。

#### 【魏晉南北朝】

王延壽 (文考), 140 ? ~ 165 ?。

陳琳, ? ~ 217。

孔融 (文舉), 153 ~ 208。

曹操 (魏武帝), 155 ~ 220。

崔琰 (子玉), 163 ~ 216。

劉楨 (公幹), ? ~ 217。

孫楚, ? ~ 293。

禰衡, 173 ~ 198。

王粲 (仲宣), 177 ~ 217。

吳質 (季重), 177 ~ 230。

阮瑀 (元瑜), ? ~ 212。

蔡琰, 177 ? ~ 249 ?。

曹丕 (魏文帝), 187 ~ 226。

李康 (蕭遠), 190 ~ 240。

応璩 (休璩), 190 ~ 252。

曹植 (子建), 192 ~ 232。

阮籍 (嗣宗), 210 ~ 263。

嵇康, 223 ? ~ 263 ?。

向秀 (子期), ? ~ ?。

韋曜 (弘嗣), ? ~ 273。

傅玄 (休奕), 217 ~ 278。

何劭 (敬祖), 236 ~ 301。

潘岳 (安仁), 247 ~ 300。

石崇 (季倫), 249 ~ 300。

趙至 (景真), 249 ? ~ 289。

孫楚 (子荆), ? ~ 293。

左思 (太冲), 252 ? ~ 307。

張協 (景陽), ? ~ 307 ?。

張華 (茂先), 232 ~ 300。

傅咸 (長虞), 239 ~ 294。

潘尼 (正叔), 250 ? ~ 311 ?。

陸機 (士衡), 261 ~ 303。

束皙, 264 ? ~ 303。

曹攄 (顔遠), ? ~ 308。

劉琨 (越石), 271 ~ 318。

張載 (孟陽), ? ~ ?。西晉の人。

袁淑 (陽源), ? ~ ?。西晉の人。

王康琚, ? ~ ?。西晉の人。

郭璞 (景純), 276 ~ 324。

盧諶 (子諒), 285 ~ 351。

王羲之, 303 ~ 361。

桓温, 312 ~ 373。

孫綽, 314 ~ 371。

范曄 (蔚宗), 398 ~ 445。

殷仲文, ? ~ 407。  
陶潛 (淵明), 365 ~ 427。  
謝靈運, 385 ~ 433。  
謝瞻 (宣遠), 387? ~ 421?。  
顏延之 (延年), 384 ~ 456。  
鮑照 (明遠), 414? ~ 466。  
郭泰機, ? ~ ?。  
謝莊 (希逸), 421 ~ 466。  
沈約 (休文), 441 ~ 513。  
江淹 (文通), 444 ~ 505。  
王中, ? ~ 505。  
孔稚圭 (德璋), 447 ~ 501。  
范雲 (彥龍), 451 ~ 503。  
蕭子良, 460 ~ 494。  
任昉 (彥昇), 460 ~ 508。  
劉孝標, 462 ~ 521。  
謝朓 (玄暉), 464 ~ 499。  
丘遲 (希範), 464 ~ 508。  
蕭衍 (梁武帝), 464 ~ 549。  
柳惲, 465 ~ 517。  
王僧孺, 465 ~ 522。  
王融 (元長), 467 ~ 493。  
何遜, 467? ~ 518。  
吳均, 469 ~ 520。  
陸倕 (佐公), 470 ~ 526。  
陸厥, 472 ~ 499。  
王筠, 481 ~ 549。  
蕭統 (昭明太子), 501 ~ 531。  
魏收, 507 ~ 572。  
庾信, 513 ~ 581。  
盧思道, 531? ~ 582。

柳晉 (顧言), 542 ~ 610。  
蘇子卿, ? ~ ?。南朝陳の人。  
丁六娘, ? ~ ?。隋の歌妓。

【唐】

蘇味道, 648 ~ 705。  
王勃, 650 ~ 676。  
李邕, 678 ~ 747。  
孟浩然, 689 ~ 740。  
王維, 701 ~ 761。  
李白 (太白), 701 ~ 762。  
常建, 708 ~ 765?。  
錢起, 710? ~ 780。  
崔護, ? ~ ?。796年の進士。  
杜甫 (老杜), 712 ~ 770。  
嚴維, 713 ~ ?。  
郭受, ? ~ ?。  
張旭, ? ~ ?。  
岑參, 715 ~ 770。  
賈至, 718 ~ 772。  
元結 (次山), 723 ~ 772。  
張志和, 730? ~ 810?。  
高適, ? ~ 765。  
韋應物, 736 ~ 791?。  
劉長卿, ? ~ 786?。  
李益, 748 ~ 827。  
孟郊, 751 ~ 814。  
權德輿, 759 ~ 818。  
張籍, 766? ~ 830?。  
韓愈 (退之), 768 ~ 824。  
劉師服, ? ~ ?, 韓愈の友人。  
呂溫, 772 ~ 811。

劉禹錫（夢得），772～842。

白居易（樂天），772～846。

柳宗元，773～819。

皇甫湜，777～835。

元稹，779～831。

魏扶，？～850。

張祜，782？～852？。

李賀，791～817。

杜牧（牧之），803～853。

楊汝士，？～？，809年の進士。

李商隱，812～858。

李群玉，813～860。

薛能，817？～880？。

貫休，832～912。

韓偓，844～923。

寒山（寒山子），？～？。

趙嘏，？～？，844年の進士。

劉滄，？～？，854年の進士。

李郢，？～？，856年の進士。

黃檗希運（禪師），？～850。

王建，？～830。

僧無可，？～？。賈島の従弟。

盧仝，？～835。

孫樵，？～？。晚唐。

吳融，？～？，唐（晚唐）。

賀遂涉，？～？。

#### 【宋】

呂蒙正，944～1011。

積寶磨，948？～1077。

魏野，960～1019。

劉師道，961～1014。

寇準（萊公），961～1023。

陳堯佐，963～1044。

林逋，967～1028。

王隨，975？～1039。

司馬池，980～1041。

夏竦，985～1051。

范仲淹（文正公），989～1052。

宋祁（子京），998～1061。

梅堯臣，1002～1060。

歐陽脩，1007～1072。

蘇舜欽（子美），1008～1048。

文同（与可），1018～1079。

劉敞，1019～1068。

王安石（荊公），1021～1086。

盧秉，？～1092。

蘇軾（子瞻・東坡），1037～1101。

蘇轍（子由），1039～1112。

張商英（天覺），1043～1121。

黃庭堅，1045～1105。

高荷（子勉），？～？，元祐時代の太学生。

姚嗣宗，1043年頃。

秦觀（秦少游），1049～1100。

賀鑄（方回），1052～1125。

陳師道（後山），1053～1101。

晁無咎，1053～1110。

張耒（文潜），1054～1114。

吳則礼，？～？。

## おわりに

今回の調査で、任淵が『山谷詩集注』二十巻で引用した書物や詩人について、おおよその姿が見えてきた。

任淵はどのテキストに拠っているのか、書誌的な情報をあまり示していない。示していたとしても、任淵が当時利用することのできた文献が、今日まで内容を変えずに伝わっているとは考えにくく、書物としては現存していても該当箇所が見当たらず逸文であるとか、文字の異同がある等のケースは、いくらでもある。任淵が当時見たテキストではそうになっていた、と信ずるほかはないだろう。

今回は表を作りながら書物や作者を抽出していったが、今後、任淵の注を頼りに黄庭堅の詩を解釈する過程で、不備や誤謬があれば正していきたい。